きたきた捕物帖

宮部みゆき

PHP
文芸文庫

○本表紙デザイン＋ロゴ＝川上成夫

目次

第一話 ふぐと福笑い ―― 9
第二話 双六（すごろく）神隠し ―― 71
第三話 だんまり用心棒 ―― 159
第四話 冥土（めいど）の花嫁 ―― 293
《解説》先が気になってしかたがない物語◎細谷正光 ―― 434

きたきた捕物帖絵図
本所深川
下谷
佐竹右京大夫
御籾蔵
郡代屋敷
柳原土手
浅草御門
柳橋
両国橋
回向院
西福寺
御米蔵
御蔵橋
浅草
田原町
駒形町
浅草寺
吾妻橋
御舟蔵
相生町
一ツ目橋
松坂町
本所
御竹蔵
石原町
二ツ目橋
弥勒寺
津軽越中守
竪川
向島
三ツ目橋
横川町
横川
新辻橋
業平橋
西尾隠岐守
津軽越中守
霊山寺
押上村
四ツ目橋
猿江
御材木蔵
北
北東
西
東

佃島
石川島
八丁堀
霊岸島
湊橋
銀座
豊海橋
田安殿
永代橋
御船手組
佐賀町
大川（隅田川）
秋元但馬守
中洲
新大橋
富勘長屋
上ノ橋
北永代町
永代寺
海辺大工町
深川元町
御籾蔵
相生橋
常盤町
正覚寺
高橋
北森下町
富岡八幡宮
おかみさんの家
浄心寺
霊巌寺
小名木川
田安殿
深川
土屋采女正
洲崎
木置場
木置場
木置場
松平伊賀守
扇橋町
新高橋
猿江橋
欅屋敷
扇橋
猿江町
猿江神社
細川越中守
一橋殿
長命湯
細川越中守
六万坪
十万坪
小名木川橋
五本松

挿画――三木謙次

きたきた捕物帖

第一話

ふぐと福笑い

一

深川元町の岡っ引き、文庫屋の千吉親分は、初春の戻り寒で小雪がちらつく昼下がり、馴染みの小唄の師匠のところで熱燗をやりながらふぐ鍋を食って、中毒って死んだ。

いい女と旨い酒肴に目がなかった人だから、これは大往生だ。いちばん下の子分だった北一はそう思う。おまえみたいな半人前にそんなことを言われてたまるかと、あの世の親分は笑うだろうけれど。

享年四十六。親分は役者のようないい男で、若いころからもちろん女たちに好かれたが、四十路に入って渋みが増してきてからは、さらにもてはやされるようになったとか。本人もわかりやすい女好きだったから、艶っぽい噂が切れることはなかった。

「千吉親分は本物の女たらしだよ。女だったら赤ん坊からババアまでなびかせちまうんだから」

親分と昵懇だった深川の差配人の勘右衛門、通称〈富勘〉がそう言っていたことがある。その富勘本人も妙に長い羽織の紐を変わり結びにしているのが目印の洒落者で、色町通いが好きだという噂があるから、類は友を呼ぶとはこういうことなのだろう。

親分は岡っ引きとしても強面ではなく、十手を振り回すのは野暮だと嫌がり、そのかわりに弁が立って仲裁上手だった。揉める人びとのなかに入り込んであちらを宥めこちらを賺し、いつの間にか落としどころを見つけてしまうのだ。

それもまた女たらしの力さ――と、富勘は言う。

「世間の揉め事のおおかたは金か女が原因だし、金の揉め事でも大声を出して騒ぐのはたいてい女と決まっているから、女あしらいが上手ければ揉め事をあしらうのも上手いのは理にかなってる」

親分の通り名〈文庫屋〉の由来はそのまんまだ。本業が暦本や戯作本、読本を入れる文庫（厚紙製の箱）売りだったのである。店と住まいは深川元町にあり、北一は住み込みで、振り売り（行商）が役目だ。日々「ぶんこやぁ、ぶんこ」と売り歩

く。

北一は三歳の夏に四ツ目の夕市でおっかさんとはぐれて迷子になり、「とりあえずうちに来い」と親分のところに引き取ってもらい、そのまんま居着いてしまって、新しい年を迎えて十六になった。だから親分が親代わりで、はぐれてしまったおっかさんのことは、顔もろくすっぽ覚えていない。迷子にしては永すぎる年月だから、そもそもはぐれたのではなく、捨てられたのかもしれなかった。

千吉親分が倒れたときも、北一は文庫を積んだ天秤棒を担いで、小名木川沿いに猿江の御材木蔵の近くを流しているところだった。そのあたりはまだ田畑が多い深川の外れだが、旗本屋敷や大名屋敷がいくつか集まっているし、地元の名主の住まいや大きな商家の寮（別宅）も散らばっているので、そこのお女中や奉公人たちが文庫をお買い上げしてくれるのである。

普通、文庫には蓋の部分に種々の家紋を描きつけるもので、お客は自分のところの家紋が入った文庫を買う。だが数年前、千吉親分が思いつきで季節の花や縁起物の絵を貼ったのを作って売り始めたら、これが当たった。華やかな色柄の文庫は、男前の親分の売り物としてもぴったりで、親分が特別にいただいていた十手にちなみ、〈朱房の文庫〉と呼ばれてたいそうな人気を誇っている。

絵を切り貼りにしたのは、それなら絵師に頼まなくても、多少の絵心のある者に内職に出してたくさん描いておいてもらい、こっちで切って貼れば安上がりだからだ。絵柄の組み合わせを好きにできるから、融通が利いて種類も豊富になる。

初売りでは宝船や富士山の絵を貼った文庫を売った。これからは梅と鶯が旬だ。商家の注文に応じて、屋号や看板を描いたものを作ることもある。そうやってこまめに工夫してきたら、近頃では「本をしまう用はないけど、朱房の文庫だけ買い集めたい」というお客も増えてきて、つくづく親分は商い上手だと北一は思う。

「ええ～、おなじみ、しゅぶさのぶんこでござぁい。はくばいこうばい、うめのはなさ～く、ぶんこはいかがでござぁい」

北一はあいにく親分のような伊達男ではないし、小柄で痩せっぽちだ。なのに不思議と声はよく通る。それと鳥や犬猫の鳴き真似が得意なので、その日は口上のあいまに鶯の音を挟みながらゆっくりと歩いていた。

ここらのお屋敷は武家屋敷でも下屋敷や抱え屋敷だから、いかめしい長屋門や冠木門ではなく、生け垣に木戸門を付けただけの造りになっている。屋根も茅葺きの方が多いくらいだ。

そんななかに一軒、北一の気に入っている屋敷があった。こぢんまりした茅葺き

の二階家で、建物の西側に見上げるような欅の大木が立っており、屋敷を守るように枝を張り伸ばしている眺めが好いたらしい。

この季節には庭に椿が咲いているから、この花を嫌う武家屋敷ではなさそうに思えるし、家紋や屋号の入った提灯や暖簾が全く見当たらないので、そこまでしか見当がつかない。

名もなく貧しく、立派な親代わりの親分はいてもどこの馬の骨かわからない北一は、どう頑張ったってこんな屋敷に住まう身分にはなれっこない。いいなあ……と思いながらちょっと一休み、ここで踵を返して来た道を戻るようにしていた。

残念ながら、何度張り切って口上をしても、この〈欅屋敷〉は文庫のお客になってくれたことがない。そもそも人が出入りするのを見かけたこともなく、ひっそりとした風情を漂わせている。

だが、その日は違った。

北一が休んでいると、欅屋敷の裏手から人が出てきて、大木の下を大急ぎで回り、表の木戸門へと近づいてきたのだ。袴姿の侍である。で、生け垣の手前で足を止めると、

「おおい、文庫屋」

と、口元に筒のように両手をあてて呼びかけてきた。野太い声だった。

「おぬし、岡っ引きの千吉のところの者だろう」

生け垣の上に、四角い顔がぬぼっと飛び出している。耳が冷たいのでほっかむりしていた手ぬぐいを取り、北一は「へい」と頭を下げた。

「毎度ありがとうございます」

すると侍は忙しなく北一を手招きした。ひどく急いでいる様子なので、北一も中腰のまま生け垣のところまで小走りで行った。

間近に見ると、その侍はぜんたいに肉付きがよく、精悍な顔つきをしていた。歳は三十過ぎぐらい――もう少し若いかもしれない。

「すまぬが、呼びつけたのは商いの用ではない。私はつい先ほど高橋の方から戻ったところなのだが」

歯切れよく言って、なぜか侍は大真面目に北一の顔を見据えた。

「おぬし、急いで家に帰れ。千吉がふぐに中毒って重篤だと、あちらの町筋では大変な騒ぎになっておった」

高橋のあたりなら、深川元町の近所である。「え！」と言って、北一は息が詰まったみたいになってしまった。

棒立ちの北一を気の毒そうに見守りながら、侍はせかせかと木戸に近づき、閂を引いて門を開けた。

「走って帰るのに、天秤棒を担いだままでは邪魔だろう。預かってやるから、あとで引き取りに来るがいい」

北一を促し、荷物を寄越せと、丸太ん棒のような腕を差し伸べてくる。

文庫は紙箱だから、山ほど積んでも重くはない。だから非力な北一でも振り売りが務まる。ぐいと曲げれば立派な力こぶができそうなこの侍の腕と肩ならば、力が余るくらいだろう。

こんな急場なのに、それがかえって気が引けた。自分が惨めなような気もして、腰も引けた。

「近隣のあの騒ぎようから推して、気の毒だが千吉はもう危ないようだった。しかし、ふぐ毒ではたちまち死んでしまうわけではないから、おぬしが急いで帰れば間に合うかもしれん。遠慮は要らぬ、さあ」

北一を急かし、侍はちょっと焦れてきたようだ。

「この屋敷は、小普請組支配組頭・椿山勝元様の別邸だ。私は用人の青海新兵衛と申す。おぬしの商い物を騙り盗ろうというのではないから安心せい」

そこまで言われて、やっと北一の呪縛が解けた。
「わ、わかりました。あいすみません！」
天秤棒を渡すと、もういっぺん深々と頭を下げて、後ろも見ずに駆け出した。あとあと、その走る様をたまたま見かけたお得意さんの一人から、
「あンときの北さん、土煙をあげてたよ」
と言われたほどの勢いだった。体格が貧相な分、北一は足だけは速いのだ。
その甲斐はあって、北一はまだ親分の息があるうちに家に帰り着くことができた。だが話はできない。親分は幽霊のように青ざめて眠っているだけで、呼吸も弱っていた。
近所のおばさんたちや、急を聞いて集まってきた兄ぃたちから、手当てに必要なあれこれを調達するよう言いつけられてまた走り回り、戻れば寝間の敷居の外に控えて、親分の本復を祈りながら、北一はまんじりともせずに夜を過ごした。
ふぐ毒に中毒ったときには、樟脳を飲ませるといいという。藍汁も効くという。スルメを炙ってその煙を嗅がせろともいう。富勘が呼んできた町医者が、
「ともかく胃の腑の中身を全部吐き出させるのがいい」
と命じたので、横向きに寝かせた親分の口のなかに湯冷ましをどんどん注ぎ込む

ようにした。親分は木偶人形のようにぐったりしているだけだから、これはひどく難しかった。修羅場の一夜だった。

結局、千吉親分は明け方に息を引き取った。

河岸からふぐを買ってきたのも、おろしたのも親分だったから、誰を恨むわけにもいかない。一緒にふぐ鍋をつついた小唄の師匠は梅香という洒落た芸名で通っていて、弟子も多い人気者だが、うわばみだということでも知られていた。そのときも酒ばかり飲んで、ふぐはあんまり食べず、中毒が軽くて済んだのは何とも皮肉だった。

集まった人たちの前で、梅香師匠は申し訳ないとさめざめ泣いたが、こういうこともあるからふぐを「鉄砲」（あたると死ぬ）というのだ、ここが親分の寿命だったんだと思うしかないと、富勘が慰めていた。

親分と師匠はかつてはわりない仲だったけれど、一年ほど前に師匠に新しい情夫ができてからは、ただの酒飲み仲間になっていたようだ。今日も親分の方からふぐを提げてふらりと顔を見せて、台所と鍋を貸せと言うから、師匠は小女に葱と酒を買いに行かせたのだという。

「あたしは親分に、ふぐは冬のもので、お正月を過ぎて食べるものじゃないだろっ

て言ったんだけど」

——こんだけ寒けりゃ真冬と同じだ、おあつらえ向きに雪も舞ってらぁ。

「それで、そうだね乙だねえって思ってしまったんだよう」

親分のこしらえたふぐ鍋は、たいそう旨かったそうである。それを聞いたとき、初めて北一はちょっと泣いた。ちょっとだけだ。男は泣くもんじゃねえと、親分に教わったから。

岡っ引きの跡目をどうするか。

千吉親分が手札を受けていたのは、本所深川方同心・沢井蓮太郎という人である。十六から見習いを始めて、今年二十二歳になったはずだ。八丁堀の同心は、表向きは一代限りだが、実は世襲がほとんどで、沢井の旦那も千吉親分とは先代からのお付き合いである。だから北一たちは、つい「沢井の若旦那」と呼んでしまう。

先代は隠居して、八丁堀の組屋敷を出て町なかに住み、俳諧の師匠をして呑気に暮らしているのだが、親分の急死を聞いて、父子揃って弔いに来てくれた。そして親分の納まった早桶が深川元町の家を出てゆくのを見送ると、さっそく今後のもろ

もろの相談が始まった。

親分の一の子分は万作という三十過ぎの男で、女房のおたまと一緒に住み込みで、生業の文庫屋に携わってきた。北一が物心ついたころには、もうこの夫婦が当たり前のようにいて、ぽこぽこ子どもを増やし続け、今では十二の男の子を頭に六人の子持ちで、長男は振り売りを手伝っている。

朱房の文庫が当たって金回りがよくなったのを機会に、親分は商いの方は万作夫婦に任せるようになっていたから、文庫屋はこの夫婦が引き継ぐしか道がない。貸家の大家（牛込の大きな古着屋だ）に承諾をもらえれば、証文を万作の名前で作り直すだけでいい。仲立ちの差配人は富勘なので、手続きに手間もかからない。

面倒なのは、岡っ引きの跡目の方だった。

まず万作は無理だ。ずっと文庫屋一筋で、千吉親分も万作に岡っ引きの子分としての働きをさせたことはなかったし、あてにもしていなさらなかった。大男だがまったくの無口で愛想がなく、陰気なのもいけない。で、万作の女房のおたまは亭主と打って変わっておしゃべりだが、生前の親分が、

――頭ンなかが年じゅうお花畑だ。

と愚痴っていたほどにおつむりが軽い。

となると二の子分、四人いる兄ぃたちの誰かになるわけで、やっぱり歳の順だろうが、これまでの手柄を考えると揉めるかなぁ――なんて北一は思っていたのだが、沢井の若旦那は膝に手を置いてこう言い放った。

「私は千吉の子分らの誰にも手札を渡すつもりはない。朱房の十手は返してもらう」

座は墓場のように静かになった。いや、墓場だって彼岸にはもうちっと賑やかか。

二重にびっくりしたことに、沢井のご隠居までこの台詞にたじろいでいる。

「蓮太郎、そなた何を言い出すのだ」

顔を真っ赤にして叱りつけるのに、若旦那の方は端正な顔の眉毛一本動かさない。

「父上に申し上げておかなかったことはお詫びいたします。しかし、これは千吉とも話し合って決め置いたことなのですよ」

――親分も承知だってぇの？

「人の命は儚いもの。ですから、見習いから正役に上がったとき、私は千吉に万に一つの際の腹づもりを問うてみました」

そしたら、親分がはっきり言ったんだとさ。うちの子分らには十手を継がせられません、と。

「千吉は進んで一筆記してくれました。お目にかけましょうか」

兄ぃたちは赤くなったり青くなったりしているが、だんだんその色が抜けて白くなってきた。沢井の若旦那は揺るがぬだけでなく、何となくおっかない。

――死人がしゃべってるみたいだ。

やがて、いちばん年かさの兄ぃが絞り出すように言った。

「そこまではっきり親分に見限られていたなんざ、お恥ずかしい。情けない限りでござんす」

がくりと頭を垂れたら、みんなしおしおとうなだれてしまった。

北一は悲しかった。

親分は本人が出来物だったから、自分で何でもできた。いざって時に自分の名代を務められるような、本物の子分は要らなかった。だから育ても育ちもしなかった。そうと承知の上だった。

――おいらたち、みんなクズだ。

北一なんか、そのクズの切れっ端だ。

そのとき、沢井のご隠居が一喝した。

「ならば、誰が松葉を守ってやるのじゃ！」

松葉というのは、他でもない千吉親分のおかみさんの名前である。ただの「松」ではない小洒落た名前は、ご隠居と同じ俳人だったおかみさんの父親がつけたそうな。

おかみさんは亡き親分と同い歳。誰も聞いたことがないのでどういう馴れ初めだったかわからないが、親分が一人前の岡っ引きになる前に所帯を持ち、ずっと仲睦まじく添ってきたらしい。らしいというのは、万作夫婦から北一まで、子分たちはみんな、おかみさんとは日々の関わりがなかったからである。

おかみさんは目が悪い。子どものころに疱瘡にかかり、命は拾ったし痘痕も残らずに済んだが、両目をやられてしまったのだという。だからほとんど外に出ず、家の奥の一室に引っ込んで、そこに出入りするのは千吉親分と、おかみさん付きのおみつという女中の二人だけだった。

なんというか、北一にとっては、おかみさんは雲の上のお人だった（兄ぃたちも似たようなものだろう）。親分の弔いでも、おかみさんは置物というか飾り物。今こんな大事な話し合いも蚊帳の外で、忘れられかけているのも、ちょっとしょうが

ない節はある。

——けど、誰が守るも何も、この家はおかみさんの家だろうがよ。

話の輪のいちばん端で、北一がほりほり顎を掻いていると、火の粉が飛んできた。

「呑気な顔をしておるが、北一よ。おまえは、今後どうするのだ」

北一が「へ？」と目を瞠ると、沢井のご隠居は呆れたように顔を歪めた。

「万作がこの文庫屋の主人になるならば、おまえも今までどおりに暮らせるかどうか覚束ぬのだぞ」

その台詞を待っていたかのように、おたまが甲高い声で応じた。「そりゃあ、北さんにも出ていってもらいますよ。文庫作りも振り売りも、うちの人と子どもらだけで充分にやっていかれるんですから」

——え？　そういうことなの？　おいら、お払い箱なのか。

今までだって、北一はこの貸家に「住んで」いたとは言い難い。台所のそばの狭い板の間で寝起きして、残り物と冷や飯を食い、月に一度親分から給金というよりは駄賃にすぎない銭をもらって、それでもいつかはもうちっとましな子分になれる日も来るだろうと（漫然とではあるが）恃んできたのに。

おたまの耳障りな言に、ご隠居はますます怒った。
「おたま、北一もとはどういう了見じゃ。松葉も追い出すという意味か」
その剣幕に、おたまはちっと身を縮めたが、元来がおつむりの軽い人なので、芯からは応えない。亭主の万作の背中に隠れながら、きぃきぃと言い返した。
「だって、あたしらは文庫屋を続けるだけでも親分には立派な恩返しですよ。墓参りは欠かしませんし供養もしますから」
「何が恩返しだ。それは乗っ取りじゃ！」
沢井のご隠居は真っ赤になっているし、万作は地蔵のように固まっているし、おたまは引き攣りながらも後に引くふうはないし、兄ぃたちは揃ってだんまりだ。みんな、おかみさんを引き受ける気はないし、それだけの器量もないのである。もちろん、北一も同じ穴の狢だけど。
沢井の若旦那が、宥めるように平らな声音で言った。「父上、落ち着いてください」
「これが落ち着いていられるか！」
「千吉がこんなふうに急死してしまった以上、情がないように見えても、収まりのいい形に捌いていくしかないでしょう」

そして、おい万作と呼びかけた。万作は地蔵のまんまである。

「おまえがこの文庫屋をそっくり受け継ぐ形にして、看板料を松葉に支払ってはどうか。松葉はその金で住まいを借り、女中と一緒にここを出て暮らせばいい」

おたまがまた喚きそうになったが、若旦那が一瞥をくれるとひゅっと黙った。さっきのあの死人の眼差しだ。魂が縮み上がる。

と、北一の後ろで声がした。

「よござんす。そういたしましょう」

振り仰ぐと、富勘が立っていた。焼き場まで早桶にくっついていったのに、いつの間にか戻っていたらしい。今日は黒紋付を着ているが、その紐もぞろりと長い。

「手前が証文を作ります。沢井の旦那に連署をお願いできましょうか」

若旦那は「もとより、そのつもりだ」と応じた。

「看板料は、いくつかの商家に聞き合わせて、相場の金額に定めましょう。いいね、万作さん」

その声に、万作はようやく身じろぎし、黙ったまんま深々と身を折って頭を下げた。承知いたしましたということなのだろう。

「……まったく」

低く呻いて、沢井のご隠居が懐紙で顔を拭う。目の縁と鼻の頭が赤い。
「北さんよ」
しゃっきりと立ったまま、顔だけ下に向けて富勘が呼びかけてきた。長いしゃくれ顎である。
「あんたは兄さんたちと違って、ほかに生計の道がない。先々どうするかはともかく、当面は文庫売りを続けさせてもらわないと、干上がっちまうよ」
「へ、へえ」
「それも承知するね、万作さん」
今度は万作は、北一を見てうなずいた。おたまは大いに不満そうで、ひょっとこみたいに口を尖らせる。
「今までだって、親分とおかみさんとこの役立たずをあたしらが養ってきたんだ」
ぶつくさと毒を吐くが、沢井の若旦那がまたそっちを見ると、みるみる寒天みたいな顔色になった。
「そンじゃ、そっちもついでに証文にしとこう」富勘がぱんと手を打った。「北さん、あたしが預かってる裏店に空きがある。ちょうどいいからそこに住みな。北永堀町にある『富勘長屋』だよ」

有り難いだろう、と言う。富勘は深川周辺でいくつもの貸家や長屋の差配をしており、それらにはみんな〈富〉の字がついているのだが、ずばり〈富勘〉はそこだけだ。それを有り難がれというのだろう。

残念だ……と、沢井のご隠居が深い溜息を吐いた。倅の若旦那が懐から扇子を取り出し、その顔を扇ぎ始める。

――沢井の若旦那ってこういう人柄だったんだなあ。

何だか狐につままれたようだったけれど、大事な相談にはけりがついたのだった。

二

富勘がきりきり立ち回ったので、おかみさんの新しい住まいは早々に見つかった。冬木町の一角にある町家で、平屋だが仙台堀が近くて風通しも日当たりもいい。五右衛門風呂ではなく、ちゃんと焚き口のついた内風呂がある贅沢な造りだった。

ここらには、商人にしろ職人にしろその日暮らしの貧乏人にしろ、千吉親分に世

話になった者は大勢いるから、家移りにも助っ人が来てくれたし、木箱や荷車も「そんなに要らねえ」というほど調達することができた。

その反対に、兄ぃたちはすげなかった。死んだ親分にはもう忠義を尽くす必要はなく、弔いが終われば義理はない。もともとの生業一本に戻るか、他の岡っ引きの親分のところへ寄りつくか、好き勝手に散ってしまったのだ。

女中のおみつは歳も近いので、北一とそこそこやりとりがあり、普段から洗い物なんかを手伝うこともあった。その流れで、当たり前のように荷造りから一緒にやっていたら、急におみつが泣き出した。

「おかみさんが気の毒で」

おかみさん付きの女中は何度も出替っていて、北一が知る限り、おみつは四代目である。雇われて二年かそこらだったはずだ。だからそんなに思い入れが深いこともなかろうに、声を詰まらせて泣きむせぶ。

「お上の御用は引き継がなくっても、文庫屋は継いだんだから、万作さんとおたまさんはおかみさんを主人と仰いで、大事にするのが筋でしょ。なのに追い出すなんて」

おみつの実家は浅草御門の近くにある一膳飯屋で、両親が達者に切り回して繁

盛しているらしい。ただ、おみつの姉さんが婿をとり、夫婦のあいだに子どもが生まれると、何かと邪険にされるようになって、居づらくて飛び出してきてしまったんだと、先に聞かされたことがある。

そういう自分の身の上と、親分を亡くして寄る辺ないおかみさんを重ね合わせて胸が痛いのかな――なんて思うのは気を回しすぎかもしれない。

「おたまさんの肚は知らねえけど、万作さんはそういうつもりだったと思うよ」

来し方を思うに、万作は強欲でも性悪でも恩知らずでもない。ただ、歯がゆいほどに口が重いだけである。

「だけど、いつものとおり万作さんが地蔵みたいに黙ってるうちに、沢井の若旦那が、おかみさんがこの家を出るようにつるつるっと話をまとめちまったんだ」

おみつは腫れぼったい目をしばたたかせる。「ふうん、そうだったの……」

「あの富勘さんも、すぐ若旦那に調子を合わせてた。だって、おたまさんはああいう人だからな」

親分抜きのおかみさんを大事にするとは思えない。しっかり金を取る約定をして、離れた方がいいのだ。あれから気持ちが落ち着いてくると、北一にもそうわかってきた。それであらためて、沢井の若旦那ってなかなかのお人なんじゃねえか

な、とも思っている。
「それにしてもこの木箱は重いなあ。中身は何だい？」
五つもある。全部載(の)っけたら、荷車が沈みそうだ。
「おかみさんがお好きな読み物よ」
まさかと思った。「へ？」
するとおみつはにっこりした。今泣いた烏(からす)がもう笑う。
「あたしが声に出して読んでさしあげるの。それが大事な仕事なんだけど、北さん、知らなかったのねえ」
そんなところを見かける折はなかった。
「おみつさん、字がよく読めるのか。えらいねえ」
「難しいものは無理だけど、黄表紙(きびょうし)や絵双紙(えぞうし)なら何とかなる。同じ本を何度も読み返すことも多いしね」
読みあぐねたときは、「村田屋(むらたや)」さんに行って教えてもらうのだ、と言う。
「村田屋って」
「佐賀町(さがちょう)にある貸本屋さん。あるじの治兵衛(じへえ)さんがいい人で、頼めば写本も作ってくれるの。たまにおかみさんのところにも顔を出してたけど、北さんは会ったこ

となないかしら」

北一は朝から日暮れまで振り売りに出ているし、帰れば飯を食って寝るだけだった。

「いっぺん会ったら忘れられない顔だけどね。炭団みたいな眉毛で、どんぐり眼だから」

荷物をすっかり運び、おみつが台所を使えるように整えたところで、おかみさんは駕籠に乗って移ってきた。富勘が付き添ってきて、新しい家の敷居をまたぐところまで手を添えた。好天で暖かく、家移りには験がいい感じがする。

人前に出ることがないからだろう、おかみさんは髪を結わずに櫛巻きにしている。今日はよろけ縞の着物の上に若草色の長羽織を着て、手に巾着袋を提げていた。

北一は黙って控えていたのに、おかみさんは上がり框のところで足を止め、こっちを振り返った。

「――北一かえ」

驚いた。何でわかるんだ？　おいらなんか、年にいっぺん元旦に、兄ぃたちにまじってご挨拶するだけだったのに。

「へい、おかみさん」

あんまりびっくりしたので、声がへんてこに裏返ってしまった。

しみじみと顔を拝むと、おかみさんは細面で、鼻がちょっぴり長めだ。肌は白く、髪はまだ豊かで白髪も目立たない。女にしてはかなり背が高く、腰が細く、こういうのを柳腰というのだろう。

――親分が見初めたんだろうな。

何て言って口説いたのかな。北一があらぬことを考えていると、閉じた瞼を軽く震わせ、おかみさんは言った。

「こんなことになって、あんたには気の毒だ。まったくそそっかしい親分ですまないね」

ふぐに中毒るなんてさ――と、うっすら笑う。おかみさんの声には独特のしゃがれたようなクセがあった。

頭を下げて、北一は一息に言った。「とんでもねえ。拾って育てていただいて、このご恩は死ぬまで忘れません。おいらはこれからも文庫売りに励みます。身の振り方も、てめえでちゃんと算段します」

富勘がするりと口を挟んだ。「北さんの住まいも決まってますんで、ご安心くだ

さい。あたしが差配してる富勘長屋ですよ」
そうかい、とうなずいて、おかみさんはまた瞼を震わせ、小首をかしげた。
「ねえ北一、あんた、どこぞに商い物を預けたまんまにしちゃいないかえ」
問いかけの意味がわかると、北一は口から心の臓が飛び出しそうになった。
そうなのだ。親分の死からこっち、あまりにいろいろ忙しなくて、振り売りも休んでいたから、ころっと忘れていた。
「お、おかみさん」
「当たりかね」
おかみさんは微笑み、富勘とおみつは目を丸くする。
「ホントかね、北さん」
「どこに預けてあるの？」
「すぐ引き取りに行ってきます！」
尻っ端折りをして駆け出す後ろから、「気をつけてね～」というおみつの声が追っかけてきた。
「おお、来た来た」

欅屋敷の青海新兵衛は、今日は着流しの袖を襷でくくって生け垣の手入れをしていた。傍らには竹箒を立てかけてある。用人というのは、植木屋の真似事までするものなのか。

「あれっきりおっぽらかしで、あいすみません、おいら――」

息を切らして詫びる北一を押しとどめ、新兵衛は生け垣の裏手の方を指さした。

「あっちへ回ってくれ」

屋敷の裏側は生け垣が切れていて、広い裏庭になっており、近くの掘割から水を引っ張ってきて、細い用水路をこしらえてある。水路の土手は傾斜が急で、平たい石を段々に置いてある。水際に下りるときの足がかりだ。洗い物には便利そうである。

勝手口の木戸から新兵衛が顔を覗かせた。

「慌てて来たのだろう。まあ、粗茶の一杯もしんぜよう」

また手招きされて、北一は欅屋敷のなかに足を踏み入れた。台所の眺めなどどの家でも似たようなものだろうが、この屋敷の水瓶はやたらとでっかい。土間はきれいに掃き清められており、竈の脇の台の上の笊に、ふきのとうが山盛りになっていた。摘んできたか、買ったばかりなのだろう。ほのかに青い匂いがする。

土間から上がってすぐの板の間の壁に寄せて、北一が預けた商売道具がそっくり置いてあった。荷台は天秤棒から外され、文庫もその脇に積み上げてある。ほっとした。

青海新兵衛は本当に番茶を淹れてくれて、湯飲みをわしづかみに、上がり框に腰を据えた。北一は立ったままかしこまる。素焼きの湯飲みが掌に熱い。

「千吉は気の毒だった。遅まきながらお悔やみを申し上げる」

振り売りなんかにも丁重な口をきく新兵衛は、最初に思ったよりは年嵩に見えてきた。物腰が落ち着いている。

「青海様は親分をご存じで」

「幸い千吉の手を借りたことはないが、高橋のたもとの碁会所で顔見知りになってな」

あの日も、その碁会所から帰ったところだったのだという。

「私は、評判の朱房の文庫の売り出し元に興味があったから、千吉に会う度に、なぜあの趣向を思いついたのかと不躾に問うたが、嫌な顔もせず相手をしてくれた。練れた人柄だったな、おぬしの親分は」

そんなことを言われて親分の顔を思い出すと、北一は鼻先がツンとなる。それを

ごまかすために番茶をがぶりと飲んでむせてしまって、新兵衛が笑う。その笑い声が響くほかは屋敷のなかは物音がせず、人の気配もない。

竈の鉄瓶がちんちんと湯気を吐く。

「あのぉ、こちらには、あんまり人がいないんですか」

確か「別邸」と言っていた。小普請組支配何とかって、屋敷の主人はお旗本なのだ。

新兵衛は気さくにうなずいた。「この数日は、私が一人で留守居をしている。普段はもう少し賑やかなのだが、本邸で行事があって、皆あちらに出払っておるのでな」

言って、鼻の下を指でこすった。

「瀬戸殿がおられるときでは、この粗茶でも横領することはできなんだ」

「瀬戸殿」というのは青海様の上役なんだろう。用人って、番茶も好きに飲むことができないくらいの下っ端なんだろうか。だから下っ端同士、おいらみたいな振り売りにも親切にしてくれるのかな。

「後先になったが、おぬしの名を訊いてよいか」

そういえば、こっちは名乗ってなかった。

「北一と申します」
「北さんか。以後、よしなに頼む」
はい、文庫買ってください。
「立ち入ったことを尋ねるが、朱房の文庫はどうなるのだ。私は気になってなあ」
買ってくれないのに気にするのかと、こだわる北一は恨みがましいか。
「商いは今までどおりです。親分の一の子分の――」
万作夫婦のことを話すと、新兵衛は太い眉毛を寄せた。
「では、朱房の十手は誰が継ぐのだ」
「誰も継ぎません。岡っ引きの手札は返上するんです」
すると新兵衛は機嫌を損ねたみたいに口の端をひん曲げた。なぜか寄せた眉根も元に戻らない。
「北さんも振り売りを続けるのかい」
「へい。おいらは他に食っていく手がありませんから」
新兵衛は湯飲みを下に置き、懐手をした。
「そんなら、ますます立ち入ったことを言おう。こいつは北さんの実入りの多寡にも関わることだから、聞いてもらっていいだろう」

落ち着かんからそのへんに座れ。そこの空樽が手頃だ。そうそう。
「私の覚えに間違いがないなら、朱房の文庫を売り出したのは、三年前の元日だったはずだ」
宝船の絵を貼ったのと、富士山の絵を貼ったものの二種類。
「まだ口上では〈しゅぶさのぶんこ〜〉と言ってはいなかった。口上が変わったのは、その月の半ばぐらいだったように思う」
何でこの人、そんな細かいことを覚えてるんだろう。
「あれを朱房の文庫と名付けたのは千吉ではなかったのかな」
北一はよく覚えていない。「えっとぉ」
「お客の誰かが言い出したのかな」
「……おかみさんだったかもしれません」
ある朝、今日からはそう口上しろと、親分が上機嫌で言ってきたのだ。万作やおたまの思いつきではありそうにないし、おみつは商いのことには口を挟まない。
「そうか。ふむふむ」
新兵衛は四角い顎の先をひねる。
「あれから今日まで、他所の文庫屋に朱房の文庫の趣向を真似られることはなかっ

たろう？」

言って、北一の返答を待たずに続けた。

「少なくとも本所深川界隈では、私は見かけたことがない。文庫屋によっては、商家から直に注文を受けて屋号を描くようなことはあろうが、広く市中を振り歩く品で、季節の花や風物、縁起物の絵柄をつけた文庫は朱房の文庫だけだった」

だったらそうなのだろう。

「しかし、今後はそうはいかんと思うぞ」

――何で？

「他所の文庫屋が猿真似を控えていたのは、十手持ちの千吉の趣向を盗むのは憚られたからだよ」

千吉親分の顔を立てたのであり、怒らせるのはまずいと恐れたのだ。だが親分が死に、跡目もいない以上、地元の文庫屋は、その気になればもう遠慮なく朱房の文庫の偽ものを作ることができる。

「千吉のおかみは、こういうことに目を光らせていて、きっちり文句を言える女か？」

そりゃ無理だ。「おかみさんは目が見えないんです」

新兵衛は顎を引いた。「おっと」

そこから新兵衛に問われるままに、北一は跡目と金の証文やおかみさんの家移りなどの経緯を打ち明けてしまった。このことで外の人としゃべる折はなかったし、北一の心の隅には、自分がもうちっとしっかりしていれば別の道があったんじゃないかという慚愧の念が（綿埃ほどには）積もっていたので、しゃべり出したら止まらなかった。

「……そういうことか」

新兵衛が呟き、鉄瓶がちんちんと鳴る。さっきからずっとだから、いいかげん湯がなくなってしまうのではないか。

「あの、鉄瓶に水を足しましょうか」

「ん？　ああ、すまんな」

木蓋をとると、やたらとでっかい水瓶の底には砂利が敷き詰めてあった。この屋敷は用水路の水を汲んで、濾して使っているのだろう。

水瓶の面に自分の痩せた顔が映るのを見て、北一はふっと我に返ったというか、よく知りもしない青海様にこんなことをしゃべるのはよくねえんじゃないか――と思ったけれど、もう遅い。

「そうすると、ますますこの策が要るな」
新兵衛は独り言のように言っている。
「早急に、これが千吉の朱房の文庫だということが一目でわかる印を作って、これから万作が作る文庫には、全てその印を付けるといい」
それだけで偽ものの出回りを防ぐことはできないが、見分けはつけられる。
「おかみには無理でも、差配人の富勘という男は頼りになりそうだから、相談してみてはどうだね」
もしも富勘のわかりが悪ければ、ここへ連れてこいと言う。
「私からよく話して聞かせよう」
「ありがとうございます」
しかしお節介焼きなお侍さんである。
「青海様は、よっぽど親分の文庫を贔屓にしてくださってたんですね」
「風流なことを考えるものだなあと感心しておったのさ。まあ、私以上に若が気に入っておられたのだが」
「若？」
新兵衛は、口を滑らせたという顔になった。「ともかく、早く富勘に相談してみ

ることだ」

「そうします。荷のこともお世話になりました」

「いろいろ紛(まぎ)れて、おぬしが放念していたとしても無理はない。屋敷に誰かおったら、私の方から届けに行ってやれたのだが、あいにく留守居になってしまったものだから」

思い出してくれてよかった、と笑う。

「おかみさんに言われたんです。そうでなかったら忘れっぱなしになるところでした」

北一が言うと、新兵衛はちょっと目を瞠った。「おかみが何と言ったのだ？」

「どっかに商い物を忘れてきてねえかって」

「目の見えぬおかみが、どうしてそんなことを察したのだろうな」

言われてみれば妙である。

「手間をかけさせてすまんが、私は興味がある。北さん、一つおかみに問うてみて、理由が知れたら教えてくれんか」

礼にはまた粗茶をふるまおう。

「瀬戸殿の目を盗むことがかなえば、羊羹(ようかん)の一切れぐらいは付けられるかもしれ

ん」

用人のなんたるかはともかく、青海新兵衛については、細かいことにすぐ興味を持ち、瀬戸殿に頭が上がらない御仁（ごじん）だということはわかった。

富勘はわかりが早かった。というか、自分もまさに同じ心配をしていたのだと言った。

「偽ものについちゃ、あたしができる限り目を光らせるつもりだったけど、それにも限りがあるからね。印っていう案をいただこう」

ちゃんとした花押（かおう）にした方がいいから、職人に頼もうと言う。

「そのお武家様、切れ者だねえ」

そうは思えねえ。

「なにしろ暇（ひま）そうでしたよ」

「用人というのは、大名家なら家老にあたる立派な役目だ。内証（ないしょう）を仕切って、奉公人を指図（さしず）するお立場だよ。暇なわけはない」

「じゃあ、本当の用人じゃなくって、ただの留守番なんじゃないですかねえ」

立派なのはきっと瀬戸殿の方だ。

「なんにせよ、印ができたらお礼を申し上げに伺おう。じゃ北さん、行こうか」

おかみさんの家移りが済んだので、次は北一の番なのである。といっても風呂敷包み一つ背負うだけだ。富勘と二人で北永堀町までぶらぶら歩く。

裏店には文庫を買ってくれるお客はいないので、北一は富勘長屋に商いに行ったことはない。ただ一昨年の夏、この長屋の木戸の並びにある小さいお稲荷さんで見ず知らずの浪人が腹を切って死に、その後始末に奔走した富勘を少しばかり手伝ったことがある。自害なのは明らかだったので、千吉親分が出張るまでもなかったのだ。

その後、富勘長屋では、今度は店子の若い浪人が闇討ちに遭って命を落とし、何かに祟られてるんじゃねえかと北一は思った。このときはさすがに千吉親分も危ぶみ、富勘と話をしたらしいが、

——町場のいざこざじゃねえ。知らん顔してていいぞ。

というわけで沙汰止みだった。

その長屋に自分が住むことになるとは思わなかった。祟りだなんてのは笑い話にしても、いい気分はしない。その分、店賃をまけてくれないかなあと思う北一はみみっちいか。

もう日暮れどきだったから、長屋の住人たちはみんな揃っていた。木戸から二軒目の一間に住んでいるという母子が、戸口の前に七輪を据えて魚を焼いている。その煙がもうもうと立ちのぼるので、

「新しくここに住むことになった文庫売りの北一だ。ごほんごほん」

「よしなにしてやっておくんなさい。ゲホ！」

「あら、こっちこそよろしくね、北さんでいいのかしら。ケホンケホン、煙たいわねえ」

あんたらの魚のせいだろうという、この母子はお秀とおかよ。お秀は仕立ての内職をしている。その向かいが魚の棒手振の寅蔵と娘のおきんと倅の太一。おきんはおみつと同じくらいの年頃だろう。太一は北一より年下に見えるが、体つきはずっとがっちりしている。

――おいらが貧弱だからな。

と思うと目を合わせられない。

北一のすぐ隣は青物売りの鹿蔵とおしか。爺さんと婆さんの夫婦だ。あともう一軒、いちばん奥に天道ぼしの辰吉とおたつという母子。母子といっても辰吉は四十過ぎ、おたつは干からびたような婆さんである。

北一は人の名前と顔を覚えるのが得意だ。煙に邪魔されても、このくらいの人数ならいっぺんで大丈夫。それに、道ばたに古道具を並べて売る天道ぼしの辰吉は、町なかで何度か見かけたことがある。

深川のこのあたりで、富勘長屋だけが格別おんぼろなのではない。歯抜けのように部屋が空いているのは、川っぷちで湿気が多いせいだろう。口うるさいかみさん連中とガキどもがみっしり住んでいて、うるさくてしょうがないより気楽でいい。

さくりと挨拶して、あてがわれた一間に入ろうとしたら、おきんが富勘に話しかけるのが耳に入った。

「笙さんが住んでたところは、もう貸さないと思ってたのに」

富勘が応じる。「根太や床板が傷んでないのはここだけなんだよ。今まで空いていたのは、たまたまさ」

先の住人が「しょうさん」と呼ばれていたのか――って、闇討ちで斬り殺された若い浪人のことかなあ。

「姉ちゃん、懐かしいのはわかるけど、いつまでもそんなこと言ってんじゃねえよ」

たしなめる声は太一だろう。弟の方がしっかり者なのかな、と思った。